

東大寺総合文化センター

設計:建築研究所アーキヴィジョン

平成の正倉院

— 本多 豊 | Yutaka Honda —

東大寺は、聖武天皇による創建以来、1,250年余りの歴史があります。

度重なる兵火や災害に遭いながらも、大仏殿、南大門、法華堂、二月堂などを含む伽藍と、数多くの仏像や宝物、また華嚴を始めとする幅広い仏教に基づく法儀を語り伝えてきました。

現在、国宝・重文に指定されているものだけでも150件余を数えます。

「東大寺総合文化センター」は、そうした東大寺が所有する、さまざまな宝物・文書資料などの保存と修理、研究のための収蔵庫、並びに図書館機能、加えて参詣者に歴史の中での東大寺の役割を伝えるミュージアムを併せ持った施設として計画されました。

建築は、テーマを“平成の正倉院”として、現代の技術を持って、由緒ある宝物・文書資料などを千年先の未来に継承できるような施設を目指したものです。

千年有余の歴史を経て宝物を今に伝える正倉院は木造建築ですが、それを現代の耐火建築に置き換えながら、正倉院同様に宝物の湿損や虫害を防ぐため、現代の保存技術を、省エネルギーに配慮して計画した正倉院です。

また、仕上げには歴史的風土保存地区としての歴史的な景観を維持するにふさわしく、長年の変化に耐え得る仕上げ材として、本瓦(屋根)、タイル(壁・床)、漆喰(壁)、不燃木材(開口部)など、一見、昔ながらの材料を用いていますが、いずれも現代の新しい技術や職人の技が込められたものとなっています。

外壁の大形タイルは、コンクリート躯体に乾式工法で取り付け、直射光の影響を少なくする二重壁としての機能を持ち、境内の雰囲気に合わせて、今も残る土壁や木の味わいを持たせました。

床の600角タイルは^{せん}塀を表現したのですが、床の強度の他、外部においては滑り止め、展示室においては文化財移動時の振動に配慮した平滑性が要求されたため、INAX



(現LIXIL)と相談した結果、目地幅3mmの精度の高いタイル張りが可能であることが分かり、タイルで表現することとなりました。いずれも、何度も試作を重ね、限られたコストの中で見事に塀の表情を再現したINAXに、平成の職人技を感じました。建築的なボリュームは大きいのですが、景観に配慮したこれらの仕上げ材料と、軒の高さを抑えた外観で、周囲に圧迫感を与えない、以前からずっとそこにあったような自然な佇まいを実現できたと思います。

— 南大門を過ぎて、参道を大仏殿に向かう左側に位置し、移転した東大寺学園の校舎を建て替えて東大寺ミュージアム、東大寺史



研究所、華厳学研究所を置く東大寺図書館とし、体育館は、内部改修によって、約300人収容の金鐘ホールとして再生しています。東大寺ミュージアムは、美術品を展示する場というよりも、仏様が安置される御堂として計画されています。

東大寺が千年有余にわたり護り伝えてきた宝物や教えを、さらに千年、後世に伝える一端を、この「東大寺総合文化センター」も担い続けていくことを願っています。



1,2—正面入り口まわり
3—正面外観 | 4,5—東大寺ミュージアム
6—正面入り口まわり床タイルディテール
7—外壁タイルディテール



ほんだ・ゆたか—建築家、LAN代表取締役、元・建築研究所アーキヴィジョン副所長/1959年生まれ。1982年、武蔵工業大学建築学科卒業。同年、建築研究所アーキヴィジョン入社。2011年、LAN設立。主な作品：奈良県立橿原考古学研究所[1992]、相模原市立博物館[1995]、東京文化財研究所[2000]、萩博物館[2004]など。

テクニカルレポート

焼き物の可能性

桃崎 一 | Hajime Momosaki

1. 外壁タイル

【素材の選定】設計者からの要望は、機能的には日射の影響を極力抑えること、デザイン的には本瓦、漆喰、木などによって培われた歴史的な景観と調和し、さらに現代の新しい技術や職人の技が活きる素材であることでした。これを受け、大形タイルをデュベルファスナー工法で取り付ける提案をしました。

【工法】デュベルファスナー工法は、タイルの裏面にアンカー金具(デュベル)を埋設し、裏面から躯体側の長尺レールにリベット止めする乾式工法です。スウェー方式のため、地震に対して追従性が高く、安全性も高いと定評があります。また、金具による完全乾式で留め付けるため、定期報告制度の10年ごとの全面点検が免責されます。さらに、躯体との間に断熱材を設ければ外断熱工法とすることも可能です。

【タイル】H747.5×W489.2mmの土壁調タイルで、カットの位置を製造段階で工夫することによって、パターン化しない面構成を考案したものです。色は渋い黒(施釉+粉加飾)とし、2枚を空目地で突き付けてアルミキャストの押縁で押さえ、2枚を1パターンとして構成しました。

また、展示室であるため照明は間接で抑え気

タイルの色は、現寸大の巨大な壁面モックアップを鉄骨を組んで作成し、設計者と大勢の施主の皆さまにご検討いただきました。瓦の黒、漆喰の白、そしてアルミキャスト枠に組み込まれたタイルの大壁面が見事に調和し、ほぼ全員一致で現在の色に決定しました。見本選定段階では数種の色を用意していましたが、現寸大の大壁面で見ると全体として理解できるため、他の素材との取り合いの美しさを改めて認識できました。

2. 東大寺ミュージアム床タイル

【タイル】H585×W585mmの乾式タイルですが、特に、タイル自体の強度と滑りにくさが求められ、粉加飾の技術を使って防滑材を焼き付けたことが大きな特長です。滑り試験だけではなく磨耗試験、さらにはメンテナンス性を考慮した汚れ試験なども繰り返し実施してデータを取り、現場と確認を取りながら進めました。また、大形タイルに対して3mmの極細目地を実現していますが、焼成後に四辺にわずかな面取り処理を施しました。これは車椅子がスムーズに進行できるように…というご要望に、乾式タイルの製造精度と施工精度で応えたものです。

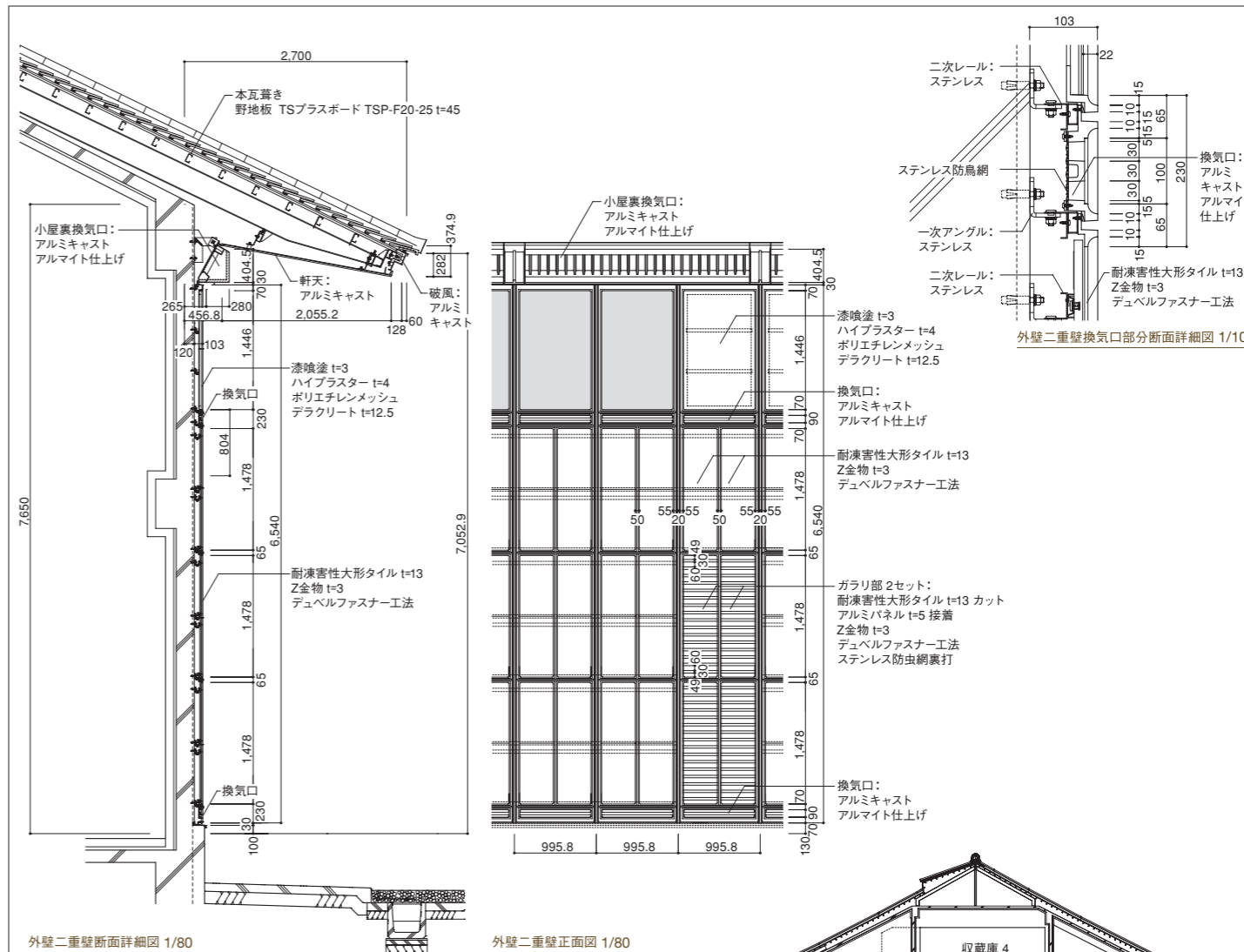
色合いは黒系統と早くから決まっていた。しかし、外まわりの床タイルの色合いが決定した後に、青味や赤味で質感を微調整し、外部と内部の床の色合いの協調を図りました。また、展示室であるため照明は間接で抑え気

味になっていますが、それによって目地通りが際立ち、また滑り止めの骨材がほのかにきらめいて、一層、美しく感じられます。

3. 正面入り口まわり舗床タイル
【タイル】H568.5×W568.5mmのタイルを6mmの細目地で張り、長い正面入り口まわりの舗床を構成しています。質感は焼き物らしいテラコッタ調の湿式タイルをご要望でした。しかし、タイル自体は重量車の通過にも耐える強度が要求されました。11本の列柱に対して対角線状となる四半目地に割り付け、特に柱下部のディテールを美しく収めるためにタイルの四辺をカットし、寸法精度を高めました。さらに、焼き物らしい色合いのぼらつきを加え、工芸品のような美しい回廊風玄関が出来上がりました。

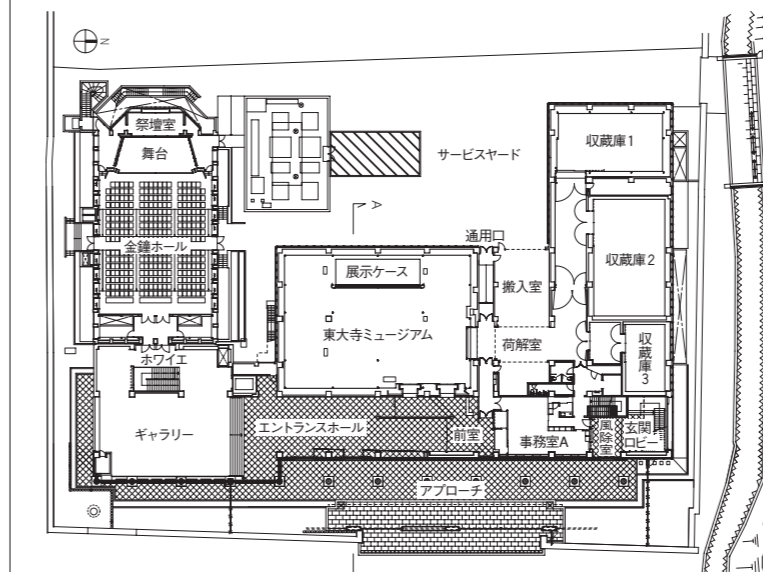
この細長い舗床面を意識し、タイル工場検品時には約25㎡分を長く敷き並べ、湿式特有の柔らかな歩行感覚を確かめていただくと共に、目線の高さから、さらには2階から鳥瞰で眺望していただきました。今でも皆さまの「素晴らしい」という声と笑顔がよみがえります。設計者の終始一貫した思い、現場元請さんの総合的な統括力、施工店の技術や工夫など、皆さまに導かれながら歴史的なものづくりに参加できたことを、工場ともども誇りに思います。

ももさきはじめ—DINAONE INAXタイルPJ西日本営業部長

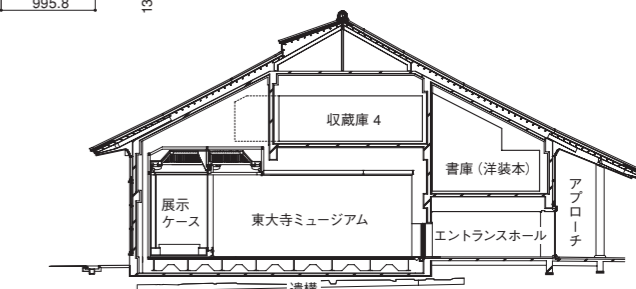


外壁二重壁断面詳細図 1/80

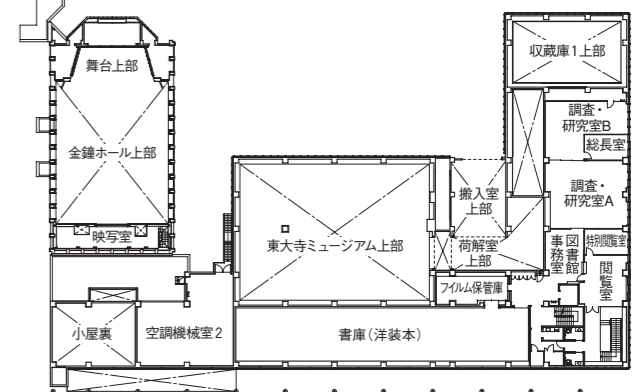
外壁二重壁正面図 1/80



1階平面図 1/1,000



A-A'断面図 1/500



2階平面図

建築概要

名称:東大寺総合文化センター | 所在地:奈良県奈良市水門町100 | 敷地面積:344,282.04㎡(東大寺境内) | 建築面積:3,431.06㎡ | 延床面積:5,855.23㎡ | 規模:地下1階、地上3階 | 構造:RC造、一部S造 | 工期:2009.2-2010.9 | 設計:建築研究所アーキヴィジョン | 施工:大林組・三和建設・コセケンJV

●INAX使用商品

外壁 | タイル:乾式大形特注品 AGC-747.5×489.2 / U9755SO+DF 他+DF金具 || 正面入り口まわり | 床タイル:湿式大形特注品 FC-11 / 568.5×568.5×15 / E0104-31 || 東大寺ミュージアム | 床タイル:乾式大形特注品 AGS-585×585 / U10211SF,T=16